

異邦人の罪（1）ロマ1：18-32

パウロは1章冒頭において、まず挨拶を兼ねて自己紹介をなし、次に8節—15節において、感謝をもって初めてローマ訪問の計画について語り、16、17節に入りてはおのずからロマ書の主題に移り行きて、偉大なる語に包みて偉大なる思想を提出した。

挨拶を終え、感謝を終え、問題の提出を終えて、ここにこの大書簡はその序言を終わったのである。されば1章18節よりいよいよ本論に入るのである。すなわち我らの用い来たりし比喻によればロマ書本館第一に入るのである。

さらばこの大書簡の本論においてまず我らの会する語は何か。人間救済の福音を盛れる第一本館においてまず我らの目を打つものは何か。そは神の恩恵を伝える語か。いな、神の怒りを伝える火のごとき語である。

「というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に
対して、神の怒りが天から啓示されているからです。」（18節）

と18節は言う。

まことにこれ吾人の意表に出づることである。しかしながら福音はまず罪惡の指摘をもって始まる。罪の指摘あり、しかして罪の悔い改めありし後でなければ、救いの与えられる素地がない。輝くごとき福音の美屋は陰惨なる罪戾指摘いんざん ざいれい してきの土台の上に立つ。麗しき花は黒き土より咲き出づるほかはない。

キリストの福音の伝えられるに先立ちて、「主の道を備え、その道筋を直く」すべく、バプテスマのヨハネの罪惡詰責ざいあくきつせきがなくてはならなかった。罪を責めずしてまず恩恵を説くは、土台なきに家屋を建てることである。

パウロは人を救う道を熟知している。その順序を誤るがごときことはしない。彼は恩恵を説く予備として、ここにその鮮烈なるペンをふるって、ものすごき罪惡指摘に入るのである。

18節最初の語「というのは」は、18節は17節の理由として述べられた形になっている。けだし救いの必要なる理由は、神の怒りが人の上に臨みつつあるからであるという意である。

「神の怒り」の一句に接して、これをいとわしき語となす人があるであろう。しかしそれは「怒り」の一字をもって人間の怒りを想起したからのことである。人の怒りは、多くの場合において、感情の乱れを意味するいとわしき語である。

しかし神の怒りの状態が人のそれと違うことは言うまでもない。そして神の怒りの表現は事実としてこの世に臨むことを我らは認める。これ理論にあらず、実に事実の問題である。

「不義をもって真理をはばんでいる人々」は、すなわちいわゆる罪人である。善を善と知り、これを行わざるべからずと知りながら、あえてこれを抑止して不義に歩む者である。神の神たることを知りながら、心の中に実験せらるるこの真理をはばんでその発動を抑える者である。

換言すれば、真理を真理として知りながらこれに従わず、不義を不義と知りつつこれに従う者、これすなわち罪人である。罪人自身はこのことを認めないであろう。

しかし罪より救われて神に生きるに至りし人は、自己の過去を顧みて一様に認知するのである。

かかる人のすべての不敬虔（神に対して背くこと）と不義（人に対して道徳的に義ならざること）とに向かって神の怒りは天より啓示されている。あたかも子の不義に対しては父は怒らざるを得ざるがごときものである。

「啓示されている」は現在動詞である。ゆえに、今すでに神の怒りが現れつつあるを意味する。では何をもって神の怒りの現れとなすか。

この問題について、学者は種々の意見を提出する。しかしそのうち最も合理的なるものは、24節以下に描かれる乱れたる状態そのものがすなわち神の怒りの発表であるとなす見方である。しかる時は、18節の総括的断定を19節以下が解明したことになるのである。

1章19節－32節は三段に分けて見ることができる。第一段は19-23節である。ここに異邦人の偶像崇拜の心理はすこぶる適確に挙げられている。

「それゆえ、神について知られることは、彼らに明らかです。それは神が明らかにされたのです。

神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。

それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。彼

らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。」(19-23節)

「神について知られること」とは何を意味するか。これを原文のままに訳せば「神に関して人の知り得るべきこと」または「神に関して人に知られること」となる。

その意味するところは、何ら特殊な啓示によらずして、自然と人に知られるところの神的知識をさすのである。

すなわち唯一の神の存在すること、およびその神の大体の性質（例えば善を愛し悪を憎むこと、またその限りなき力の所有者なること等）は、異邦人の間にあってもきわめて明らかである。神はすでにこれを彼らに現したもうたのである。

神は彼らに人たるの本性を与え、理性と良心とを与え、かつ宇宙万物という材料を与えて、彼らに神的知識を得る道を開きたもうたのである。ことに彼らの間の哲学者、宗教家、知者、識者等、比較的優秀なる頭脳と感受性を有する者には、神に関する知識がある程度までは当然備わるべきはずである。

まことにしかり、神には限りなき力（永遠にわたる力）がある。彼は偶像神のごとき無力なるものではない。宇宙を支配し万物を動かす永遠の力が彼にある。

そして彼にはまた明らかに「神性」がある。彼はかの多神教の神々のごとき卑劣なる性能の所有者ではない。

真に万物の造り主たるところの神たる性を具有しているのである。そして神のこの力とこの神性との備われることは、宇宙万物に明らかにしるされている。…

しかるに彼ら異邦の民は「彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝も」しない。彼らは心に与えられおる真理をはばんで、神を認めつつしかも神を否認するのである。(以下省略)

